NB
NANIWA

死と挑戦・笹沢左保・ナニワブックス

大衆と共に生き
大衆と共に伸び行く
ナニワ・ブックス NANIWA-Books

死と挑戦

昭和37年9月15日発行　　¥ 280

著者　笹沢左保
発行者　今井二三雄

発行所　東京都千代田区神田神保町1の53　株式会社 浪速書房
振替東京12840

落丁乱丁は本社にてお取替致します。

死

と

挑

戦

目

次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

プロローグ　七
第一章　狂った真昼
犯さる　一〇
犯す　二五
洞窟のグループ　四〇
対決　五四
血　六八
死の海　八三
第二章　残酷な宿
凶兆　九八
侵入者　一一
明日はない　一三六

決　闘　一四一
死と脱出　一五五
彼方へ　一六九
第三章　明日を砕け
イシミヤ？　一八三
美人局　一九九
危　機　二一三
追いつめられて　二三七
その正体　二四一
報　復　二五八
エピローグ　二七三

プロローグ

その夜――。

三人の若者は新橋のバー『猫』でハイボールを飲んだ。

バーは混まなかつた。カウンターの止り木に、逆光を受けた三人のシルエットがあるだけだつた。

三人の若者は知合いでも友達でもなかつた。偶然、同じ時刻にバー『猫』の客になつたのに過ぎない。

しかし、三人はそれぞれ不安と空虚さを胸に抱き、何かを求めているのだと、敏感に察し合つた。それが互いに気安くさせる原因だつた。酔いが口を軽くさせ、何となく声をかけ合い、そして一緒にハイボールを呷る結果になつた。

「わけもなく不安なんだ」

と呟いたのは、真一というトラックの運転手だつた。

「地球が爆発すればいい……」
そう太々しく吐き出したのは、名もないバンドでペットを吹いている貞義である。
「おれには何かが欠けている」
キャバレーのバーテンをやつている哲也がそう言つて肩をつぼめた。
明るい言葉は交されなかつた。三人とも悪い予感を持つていたのかも知れない。
空いている店の中、乾いた表情の女たち、それに鳴り続けているレコードのラテンリズムまでが、空々しく寂莫とした感じだつた。
三人の胸には、別に具体的な苦悩の因はなかつた。強いて凝固した不満と言えば、
「ブルジョアに対する反感だ」
と、貧しい一家の柱となつている真一は洩らすだろうし、貞義は、
「おれは実の兄貴に憎悪を感じている」
と言い、哲也は、
「恋人に会いたい」
と、遠くを見るような目をするだろう。
だが、そんなこととは別に、彼等には残酷な宿命があつた。それが目には見えない枠となつて彼等

を締めつけていた。枠である。しかも黒枠であつた。

十時を過ぎた頃になつて、三人はバー『猫』を出た。別れの時が来たのである。露地を出たところで、三つの影は三方に散つた。

降り出した雨に、ネオンが滲んで見えた。新橋から銀座へかけて、灯の花が開いていた。だが、この薄汚れた露地は暗かつた。

ふと、点滅するネオンの赤い光りに小さな黒い塊りが浮き上がつた。露地に捨てられた黒猫の死骸であつた。

開かれた目玉が、三人を見送つているようだつた。古風な表現をすれば、三人の行手を暗示する凶兆のような猫の死骸だつた。

『時間』だけが、三人の後を追つた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

第一章　狂つた真昼

犯さる

1

《いい肢体してやがる》

目の前を通り過ぎる女を仰いで、加山真一はそう思つた。

三寸のハイヒールのサンダルをつつかけている。それが、腰のうねり工合いを煽情的にしていた。胸の厚味も胴のくびれも、申し分なかつた。

顔は大したこともないが、肩のあたりまでのびた長目の赤い髪の毛が野性的な美しさである。

濡れた海水着が女の曲線をクツキリと描きだしている。

サングラスをかけ、手にはビーチ・ショールを持つていた。

《どうせ、ブルジョアの有閑娘さ》

真一の胸に、すぐ反発がきた。

思わせぶりな振向き方で、真一を見やつた女を無視した彼は、また空を見あげた。空は抜けるように青かつた。

灼熱の陽光が、浜辺いつぱいに照りつけている。海面や砂地の照返しが、目に痛い。じかに太陽をみつめているようであつた。

砂地に寝転んだ背中が、ホカホカと暖かくなつてきた。爽快なはずの海水浴だつたが、なぜか真一は愉快になれない。自分とは、あまりにも階級の違う人種ばかりが多過ぎるせいかもしれなかつた。海辺の別荘に住む人か、自家用車族、それに外人がほとんどであつた。ウイークデーのためもあるが、この浜辺がそれほど混雑してないのは、そういう特殊人種を一般の海水浴客が敬遠するからだろう。

真一は、ひと夏に二度とは来られない海水浴に、この海岸を選んだことを後悔し始めていた。湘南地区の最高級の浜辺へ行きたいという妹の希望もあつて、なんの気なしにこの海岸へきてしまつたのである。

ふと、妹の姿がないのに気がついて、真一は立ちあがつた。手にはゲタをぶらさげていた。

正午近い砂浜には、人影がまばらであつた。銀砂がとぎれるはるかかなたの岩浜に、釣りをする麦ワラ帽子が点々と見えている。後を振返ると、松林がひつそりとひろがつていた。

「マチ子！」

真一は、妹の名を呼んでみた。しかし、返事はなかつた。水平線から海面を吹抜けて来る風と、波の音だけが真一の耳をおおつた。

白昼の静寂であつた。底抜けの明るさが、深夜よりも無人の感を深くした。

真一は妙な胸騒ぎをおぼえた。それは凶兆のような予感であつた。彼は松林へ向かつて大股に歩いた。日向へ出ると、砂が足の裏へくい入るように熱かつた。彼はゲタをはいた。

「マチ子！」

真一は松林の中で、もう一度叫んだ。

松林の中央を、一本の小道が続いている。それをたどると、雑草ののびたくぼみと砂丘が波うつように展開された。

土手の上に停車している一台のヒルマンが、日ざしを受けてキラリと光るのが見えた。

真一は、ふと人声を耳にした。一人や二人の声ではなく、笑つているような泣いているような、ざわめきであつた。

一つの砂丘の陰のくぼみに、若い男の頭が三つ四つと見えている。
真一は反射的にのびあがつて、くぼみの草むらをのぞき込んだ。雑草がザワザワとゆれ動いている。
瞬間、真一の背筋を戦慄がつらぬいた。
「この野郎つ！」
罵声とともに、真一の手いつぱいにつかまれたジャリが、その草むらめがけて飛散つた。男の顔が四つ、振返り、つぎの瞬間、四人の男がいつせいに走り出すのと真一が脱兎のごとく草むらへ突進するのと同時であつた。
真一がころげ込むように雑草のくぼみへ飛込んだ時、逃げ遅れた最後の一人が、足もとにくずれたように仰臥した白い肉体からジリジリとあとずさつた。
「畜生つ！」
死んだように動かない女が妹のマチ子であり、無残に引裂かれた海水着から、すでにことは終わつてしまつている、と察した真一は、顎が痛くなるほど歯をくいしばつた。
逃げ遅れた男は、蒼白に顔色を変えていた。罪の意識によるものではなく、真一の形相に対する恐怖であつた。それでも、すくみあがつた足をあやつるようにして、二歩三歩と後退して行つた。

真一は、背後に自動車の発車音を聞いた。土手にあつたヒルマンが連中のもので、彼らはそれに乗つて逃げたのだ、と判断できた。

真一のからだが、二メートルほど跳躍した。男は避けようとして尻モチをついたが、その顎へ真一のつつかけゲタをはいた長い足がおどつた。ゲタは男の顎へ突込んでから、なおも砂丘の上まで飛んだ。

「ヒイーツ」

と、男は女のような泣声をあげた。

真一の拳は二度三度、突出された男の腹へたたき込まれた。

「ぼくは何もしないつ、助けてくれ！」

男は咳込みながら、幾度も叫んだ。この男は、これからマチ子を凌辱しようとしたのだろう、と真一の混乱した頭でも推察できた。輪姦はそのグループの勢力者順位によつて、順番が決まる。

最後に回されたこの男は、異常な興奮によつて尻馬に乗つてしまつた、いわばミソツカスであり、決して主謀者でないことはわかつている。

「何もしなかつたのは、おまえだけか！」

真一は肩で息をしながら、男を見おろした。

「そうです。ぼ、ぼくだけです」
と、男は震える手で唇の血をぬぐつた。
「みんな、この土地の者なんだな？」
「ええ。あそこの、別荘へきてる者ばかりです」
真一は、男の指さす方向を見た。小高い丘の斜面に、緑の樹木に囲まれた赤い屋根や、クリーム色の壁が点々と見えている。
「よし、おれを案内して行け」
「え？」
男は驚いたように目を見開いた。
すると、目もとにまだ少年のような幼い表情が浮かんだ。
「おまえの家へ、おれを連れて行くんだよ」
「それだけは許してください。ぼくは……お金だつたら、いくらでも持つてきます。だから、家へは行かないでください」
「ふざけるな！」
男の頬で、真一の手がビシリと鳴つた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton